

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

ルーマニアにおける二つの指導者崇拝：  
コドレアヌとチャウシェスク

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-04-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 新免, 光比呂 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00000827">https://doi.org/10.15021/00000827</a>

## 第4章 ルーマニアにおける二つの指導者崇拜

### — コドレアヌとチャウシェスク

新免 光比呂

国立民族学博物館

#### 1. はじめに

バルカン半島北部に位置するルーマニアは、第一次世界大戦の戦勝によってトランシルヴァニアを獲得し、大ルーマニアを実現した。このルーマニアの戦間期とくに1930年代を彩る重要な政治的現象は、混乱した政党政治、それに続く国王独裁とならんでレジオナル運動 *Mișcarea Legionară* とよばれる右翼急進主義運動であった。同時代のドイツ・ナチズム、イタリア・ファシズムほど世界で知られているわけではないが、信奉者による政治的熱狂の程度では肩を並べ、強い反ユダヤ主義的傾向をもって実際にユダヤ人に対する迫害 (I. C. Butnaru 1992) が行われたという点で共通している。さらに運動の指導者コルネリウ・ゼレア・コドレアヌ (Corneliu Zelea Codreanu; 1899年9月13日～1938年11月30日) は、生前からバイロンの美貌、華やかで不可解な行動によって伝説的存在となり、ヒトラー Hitler、ムッソリーニ Mussolini と同じようなカリスマ<sup>1)</sup>の権威を



地図 ヨーロッパにおけるルーマニア

示していた。

一方、第二次世界大戦後の1960年代から1989年民主革命までルーマニアを支配していたのが、ニコラエ・チャウシェスク元大統領（Nicolae Ceaușescu；1918年1月26日-1989年12月25日）である。貧しい農民の子に生まれたチャウシェスクは、1947年のルーマニア社会主義共和国成立以後のデジ政権下で忠実な党員としての経歴を重ね、デジの死後は権力闘争を勝ち抜き、ついには大統領として絶対的な権力を確立した。やがて自分自身とその妻に対する個人崇拜まで国民に強要するに至り、さまざまな大衆動員の現場でナチスにも似た全体集会を行うことによって支配を強化し、教育現場、労働の現場で肖像画を掲げさせて人々の日常生活の実践の中でも独裁的支配を確実なものとした。

チャウシェスク政権下では、社会主義イデオロギーの立場からレジオナル運動が全体主義的、反動的テロリズムとして否定的にとらえられてきたにもかかわらず、大戦間期のコドレアヌ崇拜、社会主義体制下でのチャウシェスク崇拜という二つの個人崇拜には、ルーマニアにおける専制主義の歴史のなかで近代化への民族的対応としての共通した傾向がみられる。

コドレアヌは1920年代後半から資本主義的危機が深まる中でルーマニアの金融を牛耳るユダヤ人の排斥を唱え、チャウシェスクは権力闘争に過程においてライバルであるユダヤ人指導者を排除していった。さらに、コドレアヌの回りには当時のルーマニアを代表する英才が集い、文化的危機の自覚の下で「ルーマニア的なるもの」を求めて切磋琢磨していた。それに対して、チャウシェスク体制下では文化的ヘゲモニーの確立を求めた御用学者たちが西欧文化を否定し、西欧文化に対するルーマニア文化の優越性を唱えた（Verdery 1991）。政治的手法については、コドレアヌが運動の当初よりテロリズムを唱え、政治的敵対者を暴力で排除することをいとわなかったのに対して、チャウシェス



民主革命で倒れた女性の追悼十字架 ブカレスト（ルーマニア）  
新免光比呂撮影 2000年

クもまた、ライバルを排除するため、あるいは権力を維持するために、スターリンにも似た粛清を行うことにためらいはなかった。

この二人の政治的現実においては、コドレアヌが逃亡を図ったかどでの射殺という形で処刑され、チャウシェスクもまた20数年におよぶ支配の末ではあるが、1990年の民主革命における暴動、内乱の拳句、拘束され処刑されたという暴力的な運命を共有する。この二人の指導者をめぐる圧倒的な暴力の歴史は、ヨーロッパあるいは世界史のなかの周辺国家がこうむった近代の悲劇の一つであり、ルーマニアの政治文化が共同体的な集団の心性から近代的な個人へと基盤をかえていくなかで生じた出来事でもあった。

そこで本稿では、ルーマニア近代国家のなかに生まれたコドレアヌ崇拜とチャウシェスク崇拜という二つの個人崇拜の経緯を考察することで、ルーマニア近代社会と政治文化の特質を明らかにしてみたい。

## 2. コドレアヌと指導者崇拜

### 2.1 レジオナール運動とは

レジオナール運動とは、ドイツのナチズム、イタリアのファシズムとならぶルーマニアにおける右翼急進主義運動である。その特質は、指導者コドレアヌのカリスマ的かつ神秘的な性格につきるといってよい。したがって、レジオナール運動の政治的過程にみられる特徴を明らかにするためには、なによりもコドレアヌという指導者の強烈な個性を確認しておく必要がある。

### 2.2 使命の自覚

コルネリウ・ゼレア・コドレアヌは、ポーランド系ルーマニア人、イオン・ゼレンスキ Ion Zieliński の長男として1899年に生まれた。ポーランドからの移民でありながら、ルーマニア民族主義と反ユダヤ主義を強く信奉していた父親は、1910年にニコラエ・ヨルガ Nicolae Iorga とアレクサンドル・クーザ Alexandru Cuza によって創設され、保守的で反ユダヤ主義的な傾向を持つ「民族民主党」Partidul Naționalist-Democrat の地方指導者であった。このような父親の政治的傾向がコドレアヌのレジオナール運動に色濃く反映していると考えられるが、それが明らかになるのは後のことであり、当初よりコドレアヌの受けた学校教育において軍事と法律への関心があらわれていた。まずマナスティレア＝デアール陸軍学校で第六学級ま



コルネリウ・ゼレア・コドレアヌ  
Corneliu Zelea Codreanu



で学び、従軍後はボトシャニの陸軍高校で1年、さらに父親がドイツ語教師を勤めるフシ高校へ進学した。

コドレアヌの政治的活動は、1919年に入学したヤーシ大学法学部で始まる。当時の学部長は「民族民主党」創設者のクーザであり、その政治的影響力はコドレアヌを民族主義へ導いてゆくのに十分であった。おりしも隣国から迫害を逃れてきたユダヤ人の進出が著しいヤーシでは、労働運動、ユダヤ人などの左派と民族主義的傾向を示す右派両勢力の対立が激化していた。コドレアヌは、民族キリスト教社会主義を掲げる反共組織「民族意識防衛団」Garda Conștiinței Naționaleに加入し、続いてヤーシ大学法学部学生協会会長（のちキリスト教学生協会）に就任した。1922年にはドイツのベルリン大学へ留学したが、反ユダヤ主義学生運動の高まりにともない帰国し、「キリスト教民族防衛連盟」Liga Apărării Naționale Creștine (L.A.N.C.)に参加した。これは国内居住のユダヤ人に市民権を賦与しようとする憲法修正に署名運動によって反対する団体で、クーザを議長としていた。この組織への参加で、コドレアヌに対するクーザの思想的影響はさらに深まった。

1923年10月8日には、政府関係者に対する襲撃謀議のため投獄されたが、このとき獄中でコドレアヌ思想（のちのレジオナリズム）の萌芽が生まれた。そして投獄仲間がレジオナルの創立メンバーになる。

## 2.3 組織と行動

コドレアヌの思想的目覚めは、大天使ミカエルの顕現という獄中での神秘体験に基づいている。顕現したのが大天使ミカエルであるということには、おそらくキリスト教圏における重要な象徴的意味をもっている。ミカエルは守護者というイメージからしばしば山頂や建物の頂上にその像がおかれていたが、ルネサンス期に入ると燃える剣を手にした姿で描かれるようになり、中世においてミカエルは兵士の守り手、キリスト教軍の保護者となる。レジオナルの戦闘的性格は、大天使ミカエルの表象によって強化されたと思われる。

資本主義を体現するとみなされたユダヤ主義と闘う使命感に始まったコドレアヌの政治活動は、こうして新たな段階に入ったのである。その活動のために、ルーマニア民族の倫理、精神性を鍛えることと、当時の政治家たちの政治屋主義を克服することが課題とされた。コドレアヌは、毎朝、監獄のなかの教会で礼拝を行い、祭壇の扉に掲げられた聖ミカエルのイコンを活動の旗印にしたという。さらに、獄内で「十字架兄弟団」Frătie de Cruceを創設した。この集団を通して、疑似軍事訓練、遠足、ハイドック小説読書会、儀礼を行った。以下、コドレアヌの経歴については住谷に多くを負っている（住谷1994）。

その理想実現のための課題は、ルーマニア民族の倫理、精神性を鍛えることと、当時の政治家たちの政治屋主義を克服することであった。コドレアヌは、毎朝、監獄のなかの教会で礼拝を行い、祭壇の扉に掲げられた聖ミカエルのイコンを活動の旗印にしたと

いう。さらに、獄内で「十字架兄弟団」Frăției de Cruceを創設し、この集団を通して、疑似軍事訓練、遠足、ハイドゥク（義賊）小説読書会、儀礼を行った。

1924年3月29日には、裁判の結果、無罪となり釈放された。この裁判を通じて、コドレアヌは全国的な知名度を獲得した。1924年10月25日、コドレアヌは学生への虐待と暴行を指令した警察署長マンチュエを射殺し再び投獄されたが、それに対して全国的な擁護キャンペーンが繰り広げられた。裁判では社会的騒乱の罪で起訴されたにもかかわらず、正当防衛でこれもまた無罪となった。

1927年6月24日になると、コドレアヌはついに大天使ミカエル軍団Legiunii Arhanghelul Mihailを結成する。結成メンバーは、獄内生活をともにしたイオン・モツァ Ion Moțaら5人を核とし、続いて最初のメンバー15人が誓いの契約をたてた。

レジオナールの組織構成は、クイブ（巢）といわれる単位を基礎としていた。このクイブは、3人から13人までのメンバーとこれを指揮する1人のリーダーからなり、愛を基礎にしたレジオナールの小家族ともいえるものである。根本原則として、規律・労働・寡黙・学習・助け合い・名誉などが掲げられていた。未来の国の建設者となる若い幹部養成のための学校として構想され、メンバーが守るべき義務として、ルーマニア正教会に敬虔に仕えること、私欲をもたず仲間を第一にすべきこと、ルーマニア民族のために自分を犠牲することなどが定められていた。コドレアヌは、コマンドントの名誉称号を与えられ、絶対的な指導者Căpitanulとみなされた。

1929年11月8日、コドレアヌは大衆宣伝活動を開始する。政治集会を開き、反政治屋主義、民族意識覚醒キャンペーンを行った。1930年6月には、政治的組織として「鉄衛団」Garda de Fierを結成する。レジオナールというエリート組織だけでは、組織的な政治運動を行うことができなかつたため、大衆的な政治組織を設立したのである。

## 2.4 不可解な死と政治的挫折

当時のルーマニア国内の政治的状況は、カロル2世 Carol II (1938-1940) という強い個性をもつ国王によって左右されていた。ユダヤ人女性との結婚のため、一度は王位を追われたカロルが、1930年6月6日に息子である国王ミハイ Mihai をアルバ・ユリア Alba Iulia 大公にすることで、みずからが即位し復位していたのである。これにより、首相マニウ Maniu が辞職し、それ以降、国王の意を受けた人々が内閣を組閣することになった。

カロル国王は、まず歴史家ニコラエ・ヨルガ Nicolae Iorga と自由党のアルジェトイアヌ Argetoianu に組閣を命じ、1931年4月ヨルガ内閣が誕生し、このヨルガ内閣の下で、1931年11月鉄衛兵の非合法化がなされた。続いて、ヴァイダ=ヴォイエヴォド Vaida Voda 組閣、マニウの再組閣、ヴァイダ=ヴォイエヴォドの再組閣、1933年11月に退陣とめまぐるしく内閣が交替した。

コドレアヌのレジオナール運動は、既成の政治的勢力と対立しながらも鉄衛団の名の

下に合法的な政治的活動を行い、選挙を通しての政権奪取を目指していた。しかし、その方針が転機を迎えるきっかけとなったのが、1933年11月に成立したドゥカ Duca 組閣であった。ドゥカ内閣は、台頭する鉄衛団に対して弾圧を加えたが、それに対し1933年12月29日、レジオナールはドゥカ首相の射殺で弾圧に答えた。

一方、この時期に運動方針をめぐってレジオナールの内部対立が激化した。レジオナール運動の活動が大衆化することによって、先鋭な戦闘性が鈍化してしまうことに不満を持つミハイ・ステレスク Mihai Stelescu などの過激派が登場したのである。だが、この分裂の危機はステレスクの暗殺によって取り除かれた。

1934年12月には、政府による弾圧の結果、政党としての鉄衛団の終焉を迎え、鉄衛団の第三次解散となった。鉄衛団に代えて、1935年にカンタクジノ Cantacuzino 将軍をトップとする新組織「すべてを祖国のために」Totul pentru Țara が結成された。1937年にゲオルゲ・タタレスク Gheorghe Tătărescu 内閣は、当時としては珍しく4年間の任期を全うした。この時代は金融恐慌後の近代化進展期で、多くのルーマニア人の郷愁の的とされる。だが、政治的には政党の離合集散の混迷期で、政権党である自由国民党 PNL の内部も四分五裂状態であった。1938年、反ユダヤ主義的政策を推し進めるオクタヴィアン・ゴガ Octavian Goga 内閣が成立した。ゴガは、コドレアヌと平和協定をむすんだ。続いて1938年2月10日には、ミロン・クリステア Miron Cristea 総主教による挙国一致内閣が組閣された。これは右翼の首相経験者とテクノクラートを含む評議会の設置で政党の活動を停止させ、議会権限を大幅に縮小することを目的としていた。

1938年2月20日には戒厳令下において国王独裁憲法が国民投票で決定され、国王との妥協を拒んできたコドレアヌも政治的活動を最終的に放棄するにいたった。政治組織「すべてを祖国のために」を解散し、メンバーへ回状を配布し服従することを命じた。回状の内容は、「神とルーマニア民族のために犠牲になれ」「我々は暴力には訴えない。心ならずも暴力の道へ導かれたときの、過去の経験でもう十分である。いかなる暴力にも、我々は一切応じない。耐えるのだ。たとえ全ルーマニア民族が無意識な家畜の群れとして取り扱われるときであっても。我々はクーデターを行うことを欲しない<sup>2)</sup>」というものであった。

さらにコドレアヌが導いたレジオナール運動の息の根を止めたのが、世界的な歴史家でもあるニコラエ・ヨルガ首相であった。彼はレジオナールの活動を断罪する論説を発表したが、それに対してコドレアヌが抗議文で対抗した。ヨルガは内務大臣カリネスク Calinescu の勧告にしたがい、誣告のかどでコドレアヌを告発した。1938年4月16日、コドレアヌは誣告罪で60日の禁固刑を宣告され、さらに機密漏洩罪、反逆罪で起訴された。そしてレジオナール幹部の逮捕が続き、ナエ・ヨネスク Nae Ionescu、ミルチャ・エリアーデ Mircea Eliade、コンスタンティン・ノイカ Constantin Noica など多数の知識人をシンプとみなして収容所へ送った。それらの知識人には釈放の条件として転向声明書への署

名が要求され、多くがこれに従った。

コドレアヌの運命に関していえば、1938年11月30日、収容所からブカレストへの護送中、逃亡を図ったとして13人の幹部とともに謀殺された。ここにコドレアヌによるレジオナル運動は消滅し、以後の運動は、幾人かのエピゴーネン、なかでもナチス・ドイツと親密な関係にあったホリア・シマ Horia Sima などによるファシズム運動として展開していくことになる。

### 3. チャウシェスクと指導者崇拜

#### 3.1 チャウシェスク体制とは

現代の個人崇拜の一例であるニコラエ・チャウシェスクへの個人崇拜は、スターリン崇拜<sup>3)</sup>を成立させたソ連社会主義と同様、第二次世界大戦後に成立したルーマニア社会主義体制を背景としている。1946年にルーマニアを占領したソ連軍を後ろ盾に、ルーマニア共産党（当時は労働党）は選挙で政権を獲得した。指導者はアナ・パウケル Ana Pauker<sup>4)</sup>、ゲオルゲ・ゲオルギウ・デジ Gheorghe Gheorghiu-Dej<sup>5)</sup>、ルクレチウ・パトラシユカヌ Lucrețiu Pătrășcanu<sup>6)</sup>などである。やがて主導権を握ったデジは独裁的な権力をふるい、1964年までルーマニアを支配し、社会主義支配を盤石のものとした。チャウシェスクは、デジの愛弟子として遇され、後継者たちの間での権力闘争を勝ち抜き、共産党書記長として1964年から権力の座に就いた。1989年に民主革命のなかで処刑されるまでの時期に、チャウシェスクの支配は4つの時期に分けることができる。

最初の時期はブカレストの靴職人の徒弟時代から社会主義運動の活動家として頭角を示す頃までで「若きチャウシェスク」時代とでもいう時期、次はゲオルゲ・ゲオルギウ・デジの庇護のもとで権力基盤の強化を図っていた時期、3番目はデジの死後の権力闘争を勝ち抜いてから1973年のアジア訪問まで、最後はアジア訪問から1989年の革命までである。

1989年の民主革命後のチャウシェスクの運命に関しては、革命の性格や評価の変化とも関わっている。処刑後、チャウシェスクはゲンチェア Gencea 墓地に埋葬されたが、ある時期を境に、チャウシェスクの墓は多くの弔問者を引きつけることになった。1997年には、ルーマニアの伝統的な葬送儀礼の一部である墓の前での泣き歌の儀礼がはじまったことが伝えられている。その泣き歌には、社会主義体制下でのプロパガンダによって広められた決まり文句がちりばめられていた。



ニコラエ・チャウシェスク  
Nicolae Ceaușescu



チャウシェスク元大統領夫妻の墓 ブカレスト（ルーマニア）  
新免光比呂撮影 2012年

ニコラエ、愛しいニコラエ、労働者階級の息子よ、愛しいニコラエ、ニコラエ、げす野郎たちがあなたを打ち倒した！あなたは水も飲めず、煙草も吸えない、あなたの夢は人々に向けられていた、働くように励ました人々に向けられていた。素晴らしい建物を立てた。1人の失業者もいなかった。100レイで何でも好きなものが買えた。それはさらに多くのものを与えてくれた。西側は嫉妬深い。ああ、あなたの妻がいなければ、我々の国は世界で一番の国でしょう。あなたは、ルーマニア人の英雄。あなたは我々に新しい道を示してくれた。神様があなたの眠りを見守りくださるように。あなたはルーマニアの宝！（Cioraianu 2005：283）。

この内容は、普通に耳にすることができる人々の愚痴とまったく変わらないもので、チャウシェスクの頃には失業がなかった、なんでも買うことができた、その他、経済的な状況への不満から生じる社会主義体制時代への郷愁が顕著である。これを個人崇拜と呼べるかどうかは検討の余地があるが、社会主義体制への郷愁をともなったチャウシェスク崇拜への参加者は老人たちを中心にしており、いずれにせよ亡き指導者を墓地で偲ぶ一種の礼拝行為といえなくはなさそうである。

### 3.2 権力への道

チャウシェスクの生い立ちをたどると、まず1916年、オルテニア地方の小村スコルネシュティで貧しい家庭に生まれた。11人兄弟の3番目で、貧しい農家の例にもれず靴職人の徒弟としてブカレストへ送られた。そこで労働運動に目覚めたという。靴職人としてチャウシェスクの経歴は、社会主義体制下で人々の冗談のネタとなっていたが、他方で政治的プロパガンダのなかでは、チャウシェスクを労働運動のために戦った労働者として神話化するために利用されていった（Fischer 1989, Orescu 2006）。

チャウシェスクが11歳で職業教育のために故郷を離れブカレストへ向かったのは、1928



年の終わり頃である。そして初めて逮捕されたのは1933年11月23日、15歳だった。釈放後、「青年社会主義者同盟」Uniunii Tineretului Comunistという非法組織に加入する。1934年にはふたたび同じ理由で再逮捕され、ついでブカレストを追放処分となり、故郷の村に帰った。ブカレストへの帰還後は、すぐに活動を再開した。1936年にはふたたび逮捕され、ドフタナ収容所での2年間の刑を宣告される。1938年に解放され、さらに活動を継続し、1939年9月には、「青年社会主義者同盟」の書記局の一員に選出された。1940年にはまたも逮捕され、ブカレスト近くのジラヴァ Jilava に収監された。1943年8月、刑期を終えたが釈放されず、トゥルグ・ジウ Târgu-Jiu の収容所に移された。そこで1944年までゲオルギウ・デジなどの共産党のエリートたちとともに過ごし、将来の幹部への道を歩み始める。

チャウシェスクと共産党にとっての新しい生活の始まりは、1945年親社会主義政権がブカレストに成立したことであった。1946年の選挙後、共産党は権力を掌握し、チャウシェスクは1945年に党中央委員会に選出され、1946年11月には総選挙で代議員に選ばれた。1948年、農業大臣に就任、1950年、防衛副大臣に就任、1954年、中央委員会書記に就任、1965年には長年にわたる保護者であったデジの後をおって権力の中心の座に就いた。

### 3.3 権力の強化

ただし、チャウシェスクの権力奪取は、ゲオルギウ・デジの死後すみやかに達成されたわけではない。たしかに、ゲオルギウ・デジの弟子としてチャウシェスクは保護され、特権的な立場を享受していたが、ほかに第二次世界大戦中からともに活動に携わってきたライバルも存在した。チャウシェスクは、ゲオルギウ・デジがかつてモスクワ派と目されたルクレチウ・パトラシユカヌ、アナ・パウケルなどのライバルを蹴落とし権力を確立したのと同様に、マウエル Mauer、ドラギチ Draghici、ストイカ Stoica、マネスク Manescu などのライバルを排除して権力を獲得した。

チャウシェスクの権力掌握に決定的な影響を与えた国際的事件は、1968年の「プラハの春」とワルシャワ条約機構軍のチェコ侵攻であった。チャウシェスクは歴史的なルーマニア人の反ソ感情と民族主義を背景にソ連を批判し、国内においては民族的英雄に、国際社会では独自の外交を示す指導者として一躍脚光を浴びることになった。同時に、国内においても権力確立へ向けて周到な手をとった。ルーマニア知識人を懐柔するために言論の自由を強調し、民衆に対しては生活水準の向上を約束し、社会主義者に対しては民主集中制と対話を説いた。こうした柔軟な政策は、当時のルーマニア民衆のチャウシェスクへの期待をゆるがせないものにした。ただし、これらの政策が破たんするのは遠い未来のことではなかった。



### 3.4 権力の肥大, そして個人崇拜へ

権力闘争を勝ち抜いたチャウシェスクの支配に変化が生じるのは、1973年のアジア訪問後である。チャウシェスクは、北朝鮮、中国、ベトナムなどのアジアの社会主義国家を歴訪する。そこでチャウシェスクを出迎えた大衆動員の背後にある中国の毛沢東崇拜、北朝鮮の金日成崇拜に感銘を受けたチャウシェスクは、ルーマニアでも同様の崇拜を広めることを決意する。

スターリン崇拜を除いてヨーロッパに例をみない個人崇拜は、さまざまな領域に現われた。共産党大会での名前の繰り返しと礼賛、映画、文学、音楽のなかでの礼賛、テレビやさまざまなイベントでの集団的礼賛パフォーマンスなどである。それは現在の北朝鮮に関する報道で繰り返し放映されているので、ルーマニアのプロパガンダを見た経験がある人間にとっては、それは想像の範囲内にあると言える。

ひととき印象的であるのが、共産党大会での礼賛であった。延々と続く演説と拍手は、まさにヒトラーによるナチスの大会をおもわせる。あるいは福音主義運動における説教集会の熱狂にも通じる。チャウシェスクの大衆の動員と教化の手法は、集会などの基本的な手段などによって行われた。

## 4. 個人崇拜・イデオロギー・社会

### 4.1 二つの近代化

コドレアヌ崇拜とチャウシェスク崇拜という二つの個人崇拜は、2度にわたる近代化体験という見方から評価しなおすことも可能である。最初の近代化は19世紀末から20世紀にかけてさまざまな西欧政治制度の移入時期であり、次は社会主義体制下における重工業化と集団化を中心とする近代化である。

最初の近代化においては、ルーマニアは政治権力と癒着した資本家にとって楽園となった。さまざまな分野での文化が開き、黄金期とも呼ばれる。だが、この時期の資本主義経済の例に漏れず、大恐慌はルーマニアを失業と労働争議の場に変え、農村は変わらぬ貧困の中にあった。それがレジオナル運動の高揚期でもあった。

第二の近代化である社会主義体制は、そのレジオナル運動を徹底的に否定したが、経済政策としては急激な重工業化を目指して国内産業を保護する戦間期の政策を踏襲した。この産業化政策は社会主義計画経済の常套方針であり、ルーマニアに特有なものではないが、ルーマニアの前近代的な産業構造の中では、かなり革新的な意義を有していた。産業化によって都市の発達、農村の共同体の解体が進み、ルーマニア社会の大きな変化要因となっていくた。

これら二度の近代化のなかで、政治的に重要な役割を与えられたのがルーマニア農村共同体であった。19世紀からの最初の近代化のなかで農村は、それまで不在であった近



生神女就寝祭の巡礼で祈る敬虔な人々 ニクラ (ルーマニア)  
新免光比呂撮影 1995年

代国民文化の担い手としての立場をえた。同時にカリスマをもつコドレアヌへの盲信的な追従を担う保守的な存在となった。続いて第二の近代化においては、社会主義建設という課題の中で、ルーマニア民族主義を支える伝統文化の担い手とされた。

伝統文化の担い手という言説は、ルーマニア知識人によって流布されたものであるが、これは知識人が西欧文化と周辺諸国に対してルーマニア民族の文化を確立するという課題を担っていたからであり、その背景には、20世紀初頭からルーマニア社会に生じたさまざまな危機的状況があった。そうした危機は、大きな枠組みとしては西欧化するすなわち近代化の進行によってもたらされたものであり、ルーマニア農村は、その危機に対してもっとも脆弱であると同時に、伝統的なルーマニア正教会がしっかりと根をおろした空間であった。

## 4.2 ルーマニアにおける社会運動と農村

20世紀初頭のルーマニアをおそった社会的危機は、農民の負債増大、農地の細分化、農村の過剰人口など資本主義初期の構造的な農村問題に起因していたが(木戸 1977: 115)、他方では農村問題のなかに顕在化したユダヤ人の存在に対する伝統的な反感が結びついていた。

農村問題に関していえば、オスマン帝国による歴史的な支配が社会構造に決定的な影響を与えていた。すなわちルーマニア王国の前身であるドナウ二公国(すなわちモルダヴィア公国とワラキア公国)は、同じ状況下の他のバルカン諸国とは異なり、オスマン帝国による支配形態はギリシア人ファナリオット(徴税官)を介した間接支配であった。そのため、土着の土地貴族ポイエールと修道院(コンスタンチノーブルを本山とする正教会司祭たち)の強大な勢力が温存され、著しく不均衡な社会構造が維持されたのである。その結果、在地のルーマニア人領主層が形成される一方で、領主による直営地経営は発達せず、農地は原則として農民共同体によって占取される形をとった。さらに農奴解放後も大土地所有は維持・拡大されたが大農場経営は一般化せず、地主的土地所有の

上に成立したのは農民による小作経営であった。その結果、農村の最も深刻な問題である土地不足と過剰人口が悪化した。土地所有の不均衡なルーマニアでは農民の85%が土地をもたず、相続による土地の細分化と農村の人口過剰が深刻な社会問題と化した(家田1987:84)。

またルーマニアにおける社会階層の展開に関しては、土地貴族であるポイエールがトルコへの年賦金や賄賂を上乗せして農奴に近い状態の農民を容赦なく収奪したため、ルーマニア人中間層が発達せず、商業や金融業などは、ユダヤ人とギリシア人がほとんど独占した。さらに商業の発達そのものが農民の置かれた状況を悪化させた。穀物栽培とその輸出が18世紀中ごろから急速に発展したが、農村の資本主義化は進まず、その一方で農村物の商品化を担った土地貴族たちが農民への収奪を強化したのである。19世紀になってようやく中間層が現れたが、こうした土地貴族ポイエールと膨大な小作農民に挟まれ、有効な政治的勢力となることができなかった。

資本主義展開後の農村における伝統的な共同体についていえば、資本主義は農村に貨幣経済の浸透と外部世界との接触をもたらしたため、貨幣経済の流入が農村の社会構造にも重大な影響を与え、農民の伝統的生活様式や共同体の社会意識は底辺から動揺することになった。それは農村内部における階級分化としてあらわれ、貨幣経済化にともなって地主や富農層は蓄財が容易になり、一部は商人や金貸しを兼ねた。一方、大多数の中貧農は生計や納税に必要な収入を得ることができず高利の借金を負い、債務奴隷化した。こうして農民の借金増大が社会問題となり、政府は低利の融資制度をもうけたが、借りるために担保や保証人が必要であったため資金の多くは富農層の手にわたり、それが富農から一般農民に高利で又貸しされ、それがさらに農民を収奪することになった。そうした状況下で農民は伝統の破壊を生活条件の悪化と結びつけ、変化のシンボルとされた政治家や官僚や商人の住む都市を憎んだ(木戸1977:115)。

貨幣経済の浸透という経済構造の変化と関連して、ルーマニア社会においてユダヤ人の存在が大きな政治的、経済的要因となった。ルーマニア人が恐れたのは、ユダヤ人の経済力である。オスマン帝国下でのスファラディム系のユダヤ人に加えて、19世紀にガリツィアから大量に流れ込んだアシュケナージム系のユダヤ人が、土地貴族ポイエールの土地を借りたり、その領地の管理を任されたりするようになった。さらに1829年のアドリアノーブル自由貿易協定と19世紀を通じての西欧諸国の穀物需要の増大が、ルーマニア経済に影響を与えた。土地貴族ポイエールたちがぜいたくにふけり、不在地主化が進んだ影響で、ギリシア人やアルメニア人に代わって商業を支配し農民に対しては高利貸しとなったのが、このユダヤ人たちなのである。

とくに共同体の心性にもとづく農民にとってユダヤ人は、商人、金貸し、都市住民、根無し草、自分たちの生活の共同性を破壊する貨幣経済の体現者として現れた。農民の目には見えない貨幣経済の浸透、この暴力的だが正体の分からない不透明な力、それを



民主革命後の山村農業 マラムレシュ (ルーマニア)  
新免光比呂撮影 1995年

農民たちは都市という形で抽象化し、あるいはユダヤ人という形で具象化してとらえたのである。これがレジオナル運動の社会的、政治的な躍進の基礎となる反ユダヤ主義をつちかったと考えられる。

当時の農村においてみられた社会構造は、戦間期30年代から社会主義体制下での農地改革まで変わることはなかった。ようやく社会主義体制下の農地改革によって大地主層が農村から排除され、小作農が農場労働者となったのである。つまりチャウシェスクが生まれた当時の社会構造はレジオナルの時代と大きくは変わらず、その前近代的な社会構造は社会主義運動が変革の対象とした状況そのものなのであった。

社会主義体制下において変化した農村も、民主革命以後は社会主義体制時代に築き上げた社会資本が崩れ去り、残されたのは土地を返還された零細な小農民たちである。彼らの経済的困窮は、かつての貧しさとはくらべることができないが、先進諸国に比べると、かなり低水準の生活である。こうした経済的な危機を宿命として背負った存在がルーマニア農村なのだといえよう。

### 4.3 ルーマニアの政治文化と宗教

指導者コドレアヌも深く信仰していたルーマニア正教会は、1930年代と1960年代のルーマニアにおいて圧倒的な影響力を持った存在である。その源は制度化された教義と組織のなかではなく、農民を中心とする大衆の感情のなかにあった。全国の農村では、日曜日や祭日ごとに教会で聖体礼儀（ミサ）が営まれ、農民は司祭の説教を聴くとともに長年にわたって不変の儀礼的所作を繰り返してきた。その営みのなかで身体化された宗教的知識は、農民の行動を規制し、考える道筋を定め、彼らが生きる世界を構成した。司祭はその世界の中心であり、司祭個人の個性を超えた大きな存在のシンボルとして、尊敬と服従の対象となっていた。教会での定期的儀礼ばかりでなく、人々の死、出産、結婚においても、司祭は欠かせぬ存在であり、それゆえに農民にとって司祭は依存対象



であり、つまりは世界を構成する原理そのものでもあった。こうした傾向は、社会主義体制から資本主義体制への転換を経た現在でもなお、農村を中心に見られる（新免 1997：93-123）。

そしてまた、レジオナル運動は、設立当初からこうした宗教的色彩を強く帯びていた。それはコドレアヌがレジオナルの設立を決意するきっかけとなった獄中での大天使ミカエルの顕現体験にはじまる。むろん、ファシズムというものが神秘主義とかなりの親近性を帯びているということは、すでに周知の事実であって、イタリアのファシスト運動であれ、ドイツのナチズムであれ、狂信的に絶対的な存在に身を捧げ一体化をはかるという点で、神秘主義の傾向を示している。だが、レジオナル運動に関しては、もっと直接的な現象ということができる。

その具体的な表われが、集団礼拝、賛美歌、行進の形をとった一連の儀式である。これらは、組織のメンバーや信奉者の精神状態を動員に都合の良い一定方向へと導いた。またレジオナルの儀式で用いられた明暗の色彩は、帰属するメンバーたちの神秘主義的な感覚を刺激したといわれる。あるいはレジオナルは村々で、儀礼的なパフォーマンスを演じた。特殊な礼拝を組織し、大地に口づけをし、小さな袋に土をつめ、それを首にかけ、農民たちには彼らへの忠誠を誓うことを求めた（Ioanid 1990）。とくにレジオナル運動の指導者に対しては絶対的な忠誠が求められた。すなわちコドレアヌはレジオナル構成員にとっては神そのものとみなされたのである。また自発的な犠牲がメンバーには求められた。コドレアヌたちは、犠牲がもつ構築儀礼的な価値、贖罪的な価値を信じていたのである。こういった点から、コドレアヌらのレジオナル運動は政治運動である以上に宗教的運動であるとみなされうる。その意味で、レジオナル運動と正教会の信仰との内的連関が想像以上に強いと推測される。

チャウシェスク体制においても、宗教のもつ力は顕著に見られた。チャウシェスクの母親の葬儀が、ルーマニア正教会において盛大に行われたことにもそれがうかがわれる。デジ体制から引き続き宗教への監視は行われたが、弾圧、撲滅というより、宗教勢力の一方的な妥協に基づいて、ある種の癒着が生じていた。その結びつきの要因となったのが、社会主義体制下における民族主義的傾向であり、ソ連指導下における国際分業をめぐる対立によって生じたソ連との危機であった。正教会はチャウシェスクのよき支えとなったが、もともとカトリック教会に対抗して民族意識を刺激してきた正教会とモルドバなどの領土をめぐるソ連への民族主義的反感を抱く民衆とはともに民族主義的昂揚という興奮の中で手を取り合っており、チャウシェスク自身は宗教性に乏しかったが、政治的危機の中で利用することはよく知っていたわけである。

他方、チャウシェスクに対する個人崇拜そのものにはアジアからの影響があるとはいえ、キリスト教あるいは正教会の信仰のなかで重要な聖者崇敬の伝統がチャウシェスクへの崇拜を容易にしたことは十分に考えられる。同様な現象がソ連のスターリン、ポー

ランドのゴムルカ、東ドイツのホーネッカー、などでもみられたことは、社会主義体制と独裁、個人崇拜との親近性をかたるものであるし、またレーニンやローザ・ルクセンブルクなどへの崇拜も、社会主義運動がキリスト教的な終末観を共有していたとの推測を可能にする根拠を示している。

## 5. おわりに

以上のようにコドレアヌ崇拜とチャウシェスク崇拜という、ルーマニア近代における二つの個人崇拜について国内的要因を中心として考察を進めてきたが、むしろ個人崇拜は特定の地域に限定されるべき現象ではなく、ある意味で普遍的な人類史的现象といえよう。その方向でさらに考察を進めるためには、1970年代の国際的な相互影響とキリスト教における聖者崇敬という要因も考慮しなくてはならない。

1970年代のルーマニアは、同じ社会主義国家である中華人民共和国だけでなく、北朝鮮との密接な関係を維持していた。その結果、中国からは明らかに文化大革命の影響を受け、また推測ではあるが北朝鮮からは金日成の個人崇拜を学んだように思われる。

また聖者崇敬はキリスト教のみならずイスラームにもみられる強い個人的人格への崇敬である。聖遺物崇敬や墓地巡礼、祈願にみられるように、聖者は神と人をむすぶ媒介であると同時にそれ自体が聖なるものの現われとみなされる。

この点からも、ルーマニア社会の固有性だけでなく、国際的、普遍的な個人崇拜の比較研究の重要性が明らかとなる。本稿はルーマニア社会の国内的要因を中心にしたが、今後の構想としては中国の毛沢東、ベトナムのホーチミンが代表的な東アジア、ルンバ、ネルソン・マンデラなどのアフリカ、スターリンのロシア、カストロ、チェゲバラ、ペロンなどの南アメリカとの比較研究が深まることを期待したい。

## 注

- 1) カリスマに関しては、ウェーバー (1955, 1957) ; 島薮 (1982) ; 川村 (1980) を参照。個人崇拜については、Gill (1984) ; Pakulski (1986) を参照。
- 2) Circulara nr. m148 din 21 februarie 1938, in Legiunea Arhanghelului Mihail de la trecut pana in present, GazeteadeVest — Almanah, 1994, citat in Procesul 住谷 (1994) から引用。
- 3) スターリンの個人崇拜については、Paltiel (1983) を参照。
- 4) ユダヤ系の女性指導者で知識人。夫も労働運動の指導者。
- 5) のちの共産党指導者。労働者からのたたき上げの幹部。
- 6) 職業は弁護士。知識人出身の指導者。



## 参考文献

(英語)

Butnaru, I. C.

1992 *The Silent Holocaust Romania And its Jews*. New York: Greenwood Press.

Cioroianu, Adrian

2005 *Ce Ceaușescu qui hante les Roumains*. Bucharest: Editions Curtea Veche et AUF.

Fischer, Mary Ellen

1989 *Nicolae Ceaușescu: A Study in Political Leadership*. Boulder&London: Lynne Rienner Publishers.

Gill, Graeme

1984 Personality Cult, Political Culture and Party Structure. *Studies in Comparative Communism* 17(2): 111-121.

Ioanid, Radu (trad. Peter Heinegg)

1990 *The Sword of The Archangel: Fascisto Ideology in Romania*. Boulder: Columbia University Press.

Orescu, Serban

2006 *Ceaușesimul: Romania intre Anii 1965 și 1989*, Editura Albatros: Bucuresti.

Pakulski, Jan

1986 Legitimacy and Mass Compliance: Reflections on Max Weber and Soviet-Type Societies. *British Journal of Political Science* 16(1): 35-56.

Paltiel, Jeremy T.

1983 The Cult of Personality: Some Comparative Reflections on Political Culture in Leninist Regimes. *Studies in Comparative Communism* 16(1) (2): 49-64.

Verdery, Katherine

1991 *National Ideology under Socialism: Identity and Cultural Politics in Ceaușescu's Romania*. Berkeley: University of California Press.

(日本語)

家田修

1987 「近・現代東欧経済史の特徴」木戸蕪, 伊東孝之編『東欧現代史』p. 84, 東京: 有斐閣。

ウェーバー, マックス

1955 『支配の社会学Ⅰ』世良晃志訳, 東京: 創文社。

1957 『支配の社会学Ⅱ』世良晃志訳, 東京: 創文社。

川村邦光

1980 「カリスマの磁場をめぐる——カリスマ論の一考察——」宗教社会学研究会編『宗教の意味世界』東京: 雄山閣。

木戸蕪

1977 『バルカン現代史』東京: 山川出版社。

島藺進

1982 「カリスマの変容と至高者神話——初期新宗教の発生過程を手がかりとして」中牧弘允編『神々の相克——文化接触と土着主義』pp. 51-77, 東京: 新泉社。

新免光比呂

1997 「農村の宗教対立を通してみた転換期のルーマニア社会」『国立民族学博物館研究報告』22(1): 93-123。

住谷春也

1994 「両大戦間期ルーマニアの民族主義運動と文学 I — コルネリウ・ゼレア・コドレアヌ」ルーマニア研究会第13回例会発表草稿。